

新『清沢満之全集』完結に寄せて

真宗教学の公開

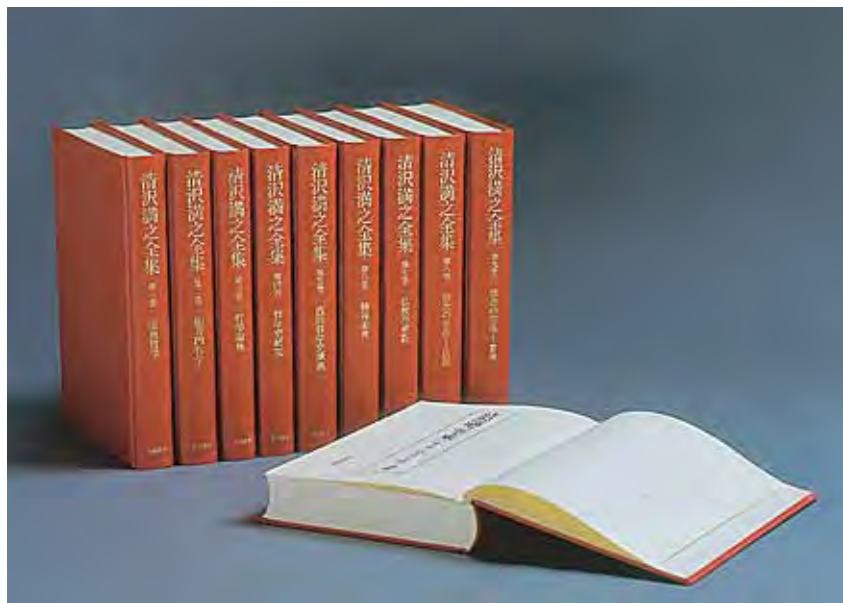
安富信哉(教授・真宗学)

清沢満之が没してから一世紀の歳月が流れた。この間に歴史は、かれが予想だにできなかった激動を体験した。百年前に一世を風靡しながら、やがて忘却の彼方に沈んだ先人たちは少なくないが、清沢の名は、消え去ることなく、その名望はむしろ高まったかにみえる。そんななかで、このたび大谷大学編『清沢満之全集』(全九巻、岩波書店刊)が無事に完結した。ここまでこぎつけた関係者のご尽力に改めて深い感謝の思いを禁じえない。

清沢の全集は、過去三回にわたり出版された。清沢没後十年目に発行された多田鼎・暁鳥敏・佐々木月樵校訂『清沢全集』(全三巻、無我山房刊)、つぎに没後三十年目に出た『清沢満之全集』(全六巻、有光社刊)、さらに没後五十年目に刊行された暁鳥敏・西村見暁編『清沢満之全集』(全八巻、法蔵館刊)で

ある。

近代真宗教学の展開という側面に関していえば、とりわけ法蔵館版『清沢満之全集』(1953-1956発行)が、果たした役割は大きかった。本全集は、刊行当初はあまり注目をひかなかったという。しかし宗祖親鸞聖人の七百回御遠忌をひかえた、1956(昭和31)年、真宗大谷派の宮谷宗務総長が、「宗門各位に告ぐ(宗門白書)」を起草したことがひとつの契機となり、清沢の名は宗門内で新たな脚光を浴び始めた。白書のなかで宮谷師は、「今日宗門はながい間の仏教的因習によって、その形態を保っているにすぎない」と戦後の状況を厳しく反省し、清沢が「如来と人間の分限を明らかにすることによって、絶対他力の大道が衆生畢竟の道であることを、現代に明白にされた」と述べ、従来宗門内で無視あ



2003年7月をもって刊行が完了した大谷大学編『清沢満之全集』

るいは異端視される傾向のあった清沢満之の宗教思想を再評価した。

翌1957年『教化研究』別冊「清沢満之の研究」が刊行され、1962年に、同朋会運動が始動されるに及び、全集も宗門内で次第に幅広い読者層を獲得するに至った。ここに清沢満之の信仰思想は、近代教学を形成した曾我量深・金子大栄の思想的源流として再認識され、『清沢満之全集』は、様々な局面で危機意識を抱く宗門人の必携となった。

ところがその法蔵館版『清沢満之全集』も、そこに付された資料に問題のあることが判明し、久しく絶版になって、再版のめどがたたないままの憂き目を経ていた。これが宗門内で清沢が新しい読者層を獲得する障害となり、また各界の研究者の研究に支障をきたしていたことは申すまでもない。それだけに新しい全集の出版は、宗門人や真宗学徒のみならず、哲学・仏教学・宗教学・歴史学・教育学など、様々な領域の研究者の念願であった。

今回の大谷大学編『清沢満之全集』は、これまでに出版された三つの全集の成果を踏まえ、さらに新発見の論稿などを追加し、かつできうる限り原資料に当たって綿密な校訂を施した、いわば決定版・清沢全集である。正確にしてかつ読みやすい全集が日本出版界の雄である岩波書店より刊行されたことで、清沢の思想が広範な読者層を獲得する道は、一挙に大きく開かれるに至った。岩波版全集の発行によって今後の清沢研究は、さらに多様な分野で多彩な開花をみせることになろう。

かつて浩々洞門人である安藤州一は、「多面の先生は、容易に捕捉するを得ざるひとり」(『信仰座談』60)と回想した。求道者にして仏教思想家、哲学者にして宗門人、教育者にして運動家—そんな清沢の人と思想は、多面的な視角からでなければ把握しがたい。それだけに、清沢を宗派的枠組からいったん解放し、多方面の人々の手に渡すことが必要

である。今回の岩波版全集はその新たなきっかけをもたらしたように思われる。

各巻の表題を一目みて、この全集の特質として、二つのことが判然とする。第一に、編年体の順序をとっていないことである。法蔵館版は、時系列的に清沢の著述を並べ、さらにその五期(建峯・骸骨・石水・臘扇・浜風)の生涯に应ずる資料や書簡を添えているが、岩波版は、その方式を踏襲していない。第二に、岩波版は、各論説を表題的にまとめていることである。これにより図らずも哲学者清沢像が映し出されることになった。全九巻の表題を一瞥しただけで、哲学者・仏教思想家としての清沢の面目が躍如としてみえる。

このことから、従来の法蔵館版に親しんできた読者は、若干の違和感を覚えることになるかもしれない。求道者、念仏者としての清沢像が見えにくいということである。ただ従来の清沢全集は、清沢の著述の取りあげ方、資料の収集など、編集方針において、清沢の宗教的な像を結ぶことにバイアスがかかりすぎ、結果、かれを宗門の狭い枠のなかに閉じ込める一面化の傾向を招いた点も否定できないであろう。その意味で、今回の岩波版は、清沢を思想界に解き放ち、真宗教学を多面に公開する端緒を開いたということができよう。

大谷大学編『清沢満之全集』
(岩波書店 2002-2003年)の各巻構成

- 第1巻 宗教哲学
- 第2巻 他力門哲学
- 第3巻 哲学論集
- 第4巻 哲学史研究
- 第5巻 西洋哲学史講義
- 第6巻 精神主義
- 第7巻 仏教の革新
- 第8巻 信念の歩み：日記
- 第9巻 信念の交流：書簡